

『史記』貨殖列傳の素封家たち

二八〇

林 田 愼之助

(一)

司馬遷は『史記』「貨殖列傳」の冒頭で、老子が桃源郷にも似た自給自足の理想的な政治が行われている小國家の様子を描いてみせた言説^①を引いて、こう批判している。

老子はいう。「理想的な政治とは、隣國がたがいに望見できる所にある、鶏や犬の鳴き聲が聞こえ、民衆はそれぞれ自分の國でとれる食べ物をうまいとし、自分の國でつくられた衣服を美しいとし、自分の國の風俗に満足し、自分の仕事にたのしみはげみ、死ぬまでおたがいに隣國とは往來しない」と。しかしこのような状態をぜひともし実現しようとして、當今において人民の耳と目に蓋^{ふた}をしようとしても、それはほとんど不可能である。

ここで司馬遷は、老子がいうように、自國の生活に満足し、隣國と往來することのない閉鎖的な小國家の形態は、古代ならともかくも、當今では通用しないとみている。漢王朝支配の四方に擴がる諸王、諸侯國の枠をこえて、物質が動き、經濟の流通がさかんであった當今を、老子流の自給自足の小國家形態に引き戻そうとしても、それはもはやできるところではなかった。

物の生産を促進し、それを流通させるためには、商人のはたらきが必要であった。そのはたらきしだいでは、商人も巨萬の富をかせぐことができた。すでに富財への欲求が、經濟を動かし、國を富ます力となっていた。司馬遷は、富財への欲求が人間の諸活動のエネルギーを發動するひきがねとなっているとみて、こう語っている。

賢明な人々が、廟堂で深謀遠慮をめぐらし、朝廷で議論をたたかわせ、信念を固守して節をまげずに死ぬのも、洞窟に住む隱者が身を清く保つて名をあげようとするのも、歸するところは富を求める一事につきるであろう。だから廉直な役人でも長年のうちには富み、無欲な商人でもやがて財をなすのである。富をもとめるのは人間の本能で、誰に教えられずとも、みなこの欲望にもとづいて動いている。

勇敢な戰士が戰場において眞つ先に驅けて城を攻め、あるいは陣地を落として敵兵を撃退し、あるいは敵の大將を斬り首を奪い、飛びくる矢玉をもとめせずに、猛火熱湯を冒して前進するのは、手厚い恩賞を期待すればこそである。

町のならずものたちが、強盜殺人のはてに死體を埋めたり、誘拐して悪事をはたいたり、墓をあばき、貨幣を偽造し、徒黨を組んで縄張りを廣げ、義理のために殺し屋をひきうけ、あるいは人けのな

いところで追い剥ぎをやるなど、法律で禁していることを無視して、馬車馬のように危険に飛び込むのも、實はみな財産を目当てのことにほかならないのだ。

また、かの趙の地方の美女や鄭のあたりの舞姫が、みめ麗しく飾りたて琴をかなで、長いたもとをひるがえして、軽やかな靴でステップを踏み、流し目で男の氣をひき、諸國を渡り歩いて老若の區別なく媚を賣るのも、お金ほしきの一心からである。また上流階級の貴公子どもが、粹な帽子や劍を美しく身につけて、騎馬のお供をつれて、車で遠出をするのも、富貴の恰好よさをひけらかそうとするからである。

狩獵や魚釣りのために、夜明け前にでかけ、夜ふけてから歸ったり、霜や雪をもとせずに、山や谷をかけまわり、猛獸の害をも恐れないのは、味覺を満足させたいがためである。ばくちや競馬、闘鶏、闘犬に血相をかえ自慢しあい、ひたすら勝負を争うのは、負けて損をするのがいやだからである。

醫術や方術、その他もろもろの技能で食べている人々が、苦心慘情して全能力をふりしぼるのも、莫大な報酬をあてにするからである。官吏が文章をでつちあげ、法律をいじくつて、文書・公印を偽造したりするような、極刑を恐れぬ所行をやるのは、賄賂の誘惑におぼれるからである。

農民・工匠・行商人それに店舗經營の商人たちが、利殖や貯蓄にはげむのは、もとより富を求め、財産をふやそうとする以外のなにものでもないであろう。

誤解を恐れずに言えば、この「貨殖列傳」の文言のなかに、司馬遷の赤裸々な人間認識の原點がある。人間が富を得ようとする欲望がいかに

強烈であるかを、事實として認識しなければ、人間のあるがままの姿がみえてこないという前提に立つての發言である。それは身分の上下を問わず、賢愚を問わず、財富への欲求が、いかに人間をつき動かし、人間の悲喜劇を演じさせているかという事實認識である。この事實認識の脱落した人間解釋が、歴史解釋がいかに脆弱なものがあるか、いかにみせかけの綺麗ごとであるかを、司馬遷はまず指摘しておかねばならなかったのである。儒教贊美の一面的な見方で、事實誤認をおかしかねない脆弱性を露呈してみせた『漢書』の班固の人間解釋、歴史解釋がその恰好な例である。執利を崇び、貧賤を羞ずる②ところに、「貨殖列傳」のモチーフがあるとみて批判した班固の硬直した歴史觀こそ批判されねばならないであろう。歴史を葛藤矛盾の多い人間的、時間的な諸現象の過程としてとらえる複眼が、そこに脱落していたからである。

先ほど、ながながと引用した列傳の富財を求める諸現象からして、そこに司馬遷の大膽な欲望肯定論が展開されているとみるのは、あまりにも單純に司馬遷の眞意を見誤ることになるであろう。

彼は、人間というものは、富のためなら、ありとあらゆる知恵や技能など持てる力のすべてを盡くして、富を自分のものにしようとするのが、人間の常態であるのとらえている。それが人間の常態であるだけに、人間には、「余力を残して、財を他人に譲ろうとするようなことはありえない」と、言葉をつづけているのも、富財を占有しようとする欲求のはげしさを、さらに強調したことになる。それほどに、人間が富を求める欲望は強烈であると認識することを前提として、司馬遷の「貨殖列傳」が、出發している事實を見落としてはならないであろう。

ところが、司馬遷はかくも烈しい人間の富への欲求についてのべたすぐあとに、つぎのようなことわざがあるとして紹介している。

百里の遠くに薪は賣るな。千里の遠くに米は賣るな。一年住むなら、穀物をまけ。十年住むなら、木を植えよ。百年住むなら徳をほどこせ。

このことわざの最後の句である「百歳なれば、之を來たすに徳を以てす」について、そのあとに司馬遷は「ここに徳というのは、人材を育てることである」と、わざわざ注釋を加えている。百里の遠方に出かけて薪を賣るなどいい、千里の遠方に出かけて米を賣るなどいいのは、遠方に出向くだけ費用がかさみ、商賣が引き合なくなるような事態が往々にして出立するから、そういう商賣をしないでも、一定の土地に一年住む気持ちがあれば、そこで穀物の種をまいて、それを育てることだ。十年住む気持ちがあれば、そこに樹木の苗を植えて、それを育てることだ。百年そこに住む気持ちがあれば、そこで人材の育成につとめることだ。かく言うことわざを、ここで司馬遷はなぜ引いてみせたのか。それは、司馬遷が、商賣も大切だが、物を作り出す生産が第一だと言いたかったからである。

一つの土地に定着して、生産、物作りにはげむ者、例えば、穀物の生産、牧畜の生産、植林の生産、鹽や鐵の生産にたずさわる者は、遠くまで、それを賣りに出かけないでも、その生産された物がよければ、それを買付けにくる商人はいくらでもいる。生産者がいて、物資が生じ、それを商う商賣が成立する。生産こそが經濟の基本だということをしっかりと覚えておくために、司馬遷は、さきのことわざを引いたのである。

物を作り出すことで、莫大な富財を築いた人物たちの傳記も、「貨殖列傳」に入っている。この生産者が富財を築いたことも注目せねばならないが、その人々が、百年の計を立てて、人材の育成につとめるならば、生産の技能はその人材によってひきつがれ、いつその磨きがかかるこ

となり、生産物の質が向上し、生産物の量が擴大する。その結果、買手が集中し、生産者の富の形成を持続的にうながすことになる。

先ほど司馬遷が「貨殖列傳」に、引いたことわざは、どこからきたものかわからないが、その原文を書き下しの文に直してみると、「之に居ること一歳なれば、之に種うるに穀を以てし、十歳なれば、之を樹うるに木を以てし、百歳なれば、之を來たすに徳を以てす」とある。「管子」という書物の權修篇にこれとよく似た言説がある。それは、「一樹百獲」ということばで、人物を養成する利を説いたものである。一たび人材を樹えると、百年の大計を得ることができるというのが、その四字成語の内容である。

この四字成語がでくる前段には、つぎのような一節がある。「一年の計は穀を樹うるに如くはなく、十年の計は木を樹うるに如くはなく、終身の計は人を樹うるに如くはなし」^③。これは一年の計畫をいうことになれば、穀物を樹えつけておくのがいちばんよい。十年の計畫ということになれば、樹木をうえつけておくのがいちばんよい。身を終えるまでの長期計畫となれば、人材をうえつけておくのがいちばんよい。〆と、いうほどの意味である。國の基礎は人である。國をささえ興すのはすぐれた人材である。そのような有為な人間を育成していくことが、終身の計、國家百年の計として、もつともふさわしいと、『管子』はみていたのである。

『管子』は、春秋時代の末期の齊の國の宰相として、桓公を助け、霸王たらしめた人物管仲の思想をのべた書とされている。『管子』は、管仲の政治思想をよく傳えているが、この書物が編まれたのは、戰國末から漢初の時代だとみなされている。

齊の國は、殷周革命の時期に、周の武王を補佐して大功をたてた太公望が、周の王朝が成立したとき、その功績により、今の山東省、齊の國

の諸侯として封ぜられたときにはじまる。そのときは、まだこの國は未開發の状態にあつた。領内の土壤は鹽分が強く、農耕に適せず、人口も少なかった。そのため、太公望は機織りを奨励して、その技術水準を高め、海に面した土地柄を利用して魚や鹽を輸出して、交易の振興をはかった。その結果、この國に人も物資もつぎつぎに集まってくるようになった。つまり齊の國はありとあらゆる物資の集散地となり、他の諸侯國から、その富強に敬意をはらわれるようになった。

その後、齊の國力は、一時衰えをみせた時期もあつたが、管仲が宰相となつて、物價の調整を行う經濟官廳を設けて以來、經濟の再建に成功し、時の齊王桓公を天下の覇者にまで押し上げ、亂れていた天下を一つにまとめることができた。管仲は、齊の國が富強になると、自分の邸宅を三ヶ所に構え、臣下の身でありながら、隣國の諸侯よりも裕福であつた。かくして、齊の國は桓公の死後も、威王、宣王の時代まで、その富強を天下に誇ることができた。

かく齊の國の成立期の太公望から、春秋末期の桓公をささえた管仲まで、政策の打つ手、打つ手が上手くいった結果が、齊の國に繁榮と經濟富強をもたらしたとのべるのは、「貨殖列傳」である。そう語つておいて、司馬遷は、「倉粟實ちて、禮節を知り、衣食足りて、榮辱を知る」という『管子』牧民篇の名言がこうした齊の繁榮を背景にして生まれてきたのだとおさえている。

道德が先にあるのではなく、生活の余裕があつて、はじめて道德がついてくるという考え方である。人間が禮法と節義を知り、なにが榮譽か、なにが恥辱かを自覺するようになるためには、國庫が豊かになり、衣食が充足するのが前提である。經濟が安定してこそ、人間はモラルの涵養に心がけるようになるのだ。このようなすこぶる現實的な管仲の思想をふまえて、司馬遷がつぎのように語っているのは、きわめて印象的である。

君子、すぐれた人間は、富を得ると、喜んでよいことをする。小人、つまらない平凡な人間でも、富を手に入れると、自分の力になつたよいことをする。水の深いところに魚がおり、山の深いところに獸が動くように、人が富むと、仁義のモラルがこれにつきしたがうのだ。富めるものは勢力を得て、いよいよ有名になるが、勢力を失うと、よりつく人もなく、しょんぼりして楽しい思いもなくなる。

(貨殖列傳)

道德は經濟の後についてくるという發想は儒家の思想にはない。管仲の思想のオリジナルであるが、人間社會の實情に合っているのは、なによりも先に道德ありきとする儒家の考え方よりも、管仲のなによりも先に經濟の安定ありきの考え方のほうである。

(二)

經濟を動かす根底には、人間の富への欲求・欲望が働いている。人間は誰しも、自分の才覺を盡くして、欲望を満たそうとする。農民は食糧を作り、山持ちは木材や鋤物を出し、工匠は器具を製造し、商人は物資を流通させることで、富を手に入れようとする。これが經濟を活性化させる原動力である。どれ一つ缺けても、人間の生活は停頓せざるをえなくなる。

司馬遷は『周書』の「農民が生産しなければ、食糧は不足する。工人が製作しなければ、器具は缺乏する。商人が販賣しなければ、必要な物資が圓滑を缺く。きこりが伐採しなければ、資材がとぼしくなる。資材がとぼしくなれば、山林湖沼は開拓されない」ということばをひき、農

工商林の四つの産業が発達するかどうかによつて、社會が反映するか、衰微するかが決定すると、考える。

經濟活動は、水が低きにつくように、やむことはなく流れて止まることを知らない。財貨は、誰が命ずるでもなく、おのずと生産され、おのずと流通してゆく。物の値段が安ければ、それを買ひ付けて、値段の高い地方へまわし、物の値段が安い時にそれを仕入れ、それが高くなつた時に放出する。こうした人間の經濟活動は、司馬遷にいわせれば、自然の法則になつてゐることになる。

春秋末期、今の蘇州と紹興あたりをそれぞれの根據地とする二つの國、吳と越の争いは、激しさを加えていた。「吳越同舟」のことわざがあるように、近接する江南の地にあつて敵對し、血みどろの戦いをくりひろげていたが、吳王の夫差は、ついに越の勾踐を會稽山に追いつめて、敗北させる。

勾踐は肌ぬぎして降伏し、それから俗にいう「臥薪嘗胆」の苦しみに耐え、吳への復讐の機に備えた。この勾踐をささえたのが、知謀にたけた宰相・范蠡であつた。勾踐は、會稽の恥をそぐべく、この范蠡と、とりわけ經濟にあかるい計然を重用して、さしせまつた困難をきりぬけることができた。とりわけ計然の經濟理論は、ばぬけてすぐれていた。それを司馬遷は「貨殖列傳」でこう紹介している。

計然はいつた。「戦争が間近いとわかれば、誰しも備えを固めずにはいないはずです。時に應じて必要なものは、時にさきだつてわかるはずです。この二つの道理をしつかりつかんでおれば、需要供給の動きは手にとるように洞察できるのです。木星が西方にある年は豐作、北方にある年は大洪水、東方にある年は飢饉、南方にある年は干魃になると五行説にあるのですから、干魃の年には、値がさがつ

た舟を買つておき、洪水の年には、値上がりを見越して車をたくわえておくのが、物の道理というものなのです。六年ごとに豐作、十二年ごとに大飢饉がやつてきます。さて、穀物の賣り値が一斗二十錢にまで値上がりすれば、農民は窮迫し、一斗九十錢まで値あがりすれば、商人は商賣ができなくなります。商人が困れば、物資は流通せず、農民が窮迫すれば、田畑は荒れてしまひます。穀物の値は上は八十錢をこえず、下は三十錢よりさがらねば、農民も商人ともに利益を受けるでしょう。穀物の販賣價格の水準を保ち、商品を公平に分ち、關所の通關税も市場の利用税も豊かにあがるようにするのが、國を治める正しいやりかたであります。蓄積の原則は、品物を完全な状態に保存し、いたんだ品物を持つてはいけません。物を賣買する場合は、腐つたり虫が食つたりしたものは、手もとにとどめず、高價な品物をためこまないことです。物資の過不足を考えれば、物價のあがりさがりはわかります。値あがり極まれば、下落にむかい、値さがりが極まれば、またあがります。高値のときは、汚物を出すように賣り出し、低値のときは、珠玉をとるように買ひ入れることです。商品貨幣は、流れる水のように動かすべきではありません」と。

越王勾踐は、この計然の經濟政策をとりあげ、實行すること十年にして、敗北以來、疲弊してゐた國家財政を立て直して、民生にも意をそそぎ、年々國庫を豊かにしていくことができた。しかも、將兵たちにも手厚い褒賞金をあたえることができた。それで、彼らは功を爭つて戦うようになり、ついに、吳の都蘇州に攻め入り、吳王夫差を滅亡に追い込んでゐる。さらに勢いにつて、越王勾踐は中原に駒を進め、五人の覇者の一人として數えられるほどに、その國勢をのぼすことができ

た。この勾踐の背後にあつて、その出處進退の計にあずかつたのが、范蠡であり、計然であつた。

司馬遷も舌をまいた計然の經濟政策は、まさしく今日の市場原理に通底する整然たる理論であつた。越王勾踐が呉を滅したのが、紀元前四七八年のことであるから、驚くべきことに、計然の經濟政策が語られ、少くとも越の國で實踐されたのは、ほぼ二千五百年ほど前のことであつた。

(三)

世に素封家という言葉があるが、それは今日も生きてゐる。大金持ち、財産家、富豪に相當するのが、素封家である。

古代社會において、封土を領有してゐる諸侯のみが、莫大な富を掌中に収めることができた。封土とは、君主から諸侯に封ぜられた者が領有する土地のことである。そうした封土をだれからもあたえられず、所有する封土がひとかけらもないにもかかわらず、自分の才覚によつて物を作り、物を動かして莫大な富財を蓄積して、その所有する富が、一國の諸侯に匹敵する者を、素封家と稱するのである。素はもとと絹の地色の白さを指すことばであつたが、それから白い、なにもないという意味に轉じて使われるようになった。これからすれば、素封の意味は、なものもない、無冠の諸侯ということになる。

富をうる職業は、きまつたものではなく、財貨の持ち主も一定不變ではないのである。財産は能力のある人のところに集まり、不肖の子からばらばらに散つていく。千金を持った富豪は、一都市に君臨する諸侯と肩をならべ、億萬長者はそれこそ王者の樂しみを享受するものだ。彼らこそいわゆる素封家——無冠の諸侯というにふさわし

いものではないであろうか。

この條りは、司馬遷が「貨殖列傳」の結びとして書きつけた文言である。そこには、素封家という三文字は出てこないが、その部分の原文を訓讀であらわすと、「千金の家は、一都の君に比し、巨萬の者は、乃ち王者と樂しみを同じゆうす。豈に所謂、素封なる者か、非か」となる。これから、素封家という言葉が生まれてきたのである。素封家という言葉は、『史記』の「貨殖列傳」のなかで初めて發見される司馬遷の造語であつた。

同じ「貨殖列傳」のなかで、素封家の概念規定を司馬遷がみずからおこなつた記事がある。

いま、役所から俸祿をもらうわけでもなく、爵位にともなう領地からの収入があるわけでもないのに、封建諸侯と同じような樂しきをもつ人々がいる。こういう人々を素封と名づける。封建領主は領地からの租税で暮らしている。年に一軒の家から二百錢の租税をとるとすると、千軒の家を支配する諸侯は二十萬錢の収入を得る。都にのぼつて參朝する費用や諸侯相互の交際費は、この収入のなかから支出される。庶民階級の農業商賣でもだいたい年に一萬錢の資本によつて、二千錢の利潤を得る。百萬錢の資本があれば、利潤の収入は年に二十萬錢がある。このなかから、兵役・夫役の代納金と人頭税を支拂つても、好きなように衣食の欲をみたすことができる。

素封家は政治的な局面ではあまり躍り出てくることはないが、實質的には、經濟力にものをいわせて、その政治的局面を左右しかねない働きをみせることがある。そういう素封家は歴史を大きく動かす役割を擔う

存在となってきた。例えば、「貨殖列傳」に登場する富豪のなかに、漢の四代皇帝・景帝の時代におこった同族諸侯の反亂・吳楚の亂のさなかに、財をなした無鹽氏がいるが、彼の經濟力は、その反亂鎮壓に大きな役割を果たしている。

吳楚七國の反亂がおこったとき、長安にいた諸侯たちは、政府の討伐軍に加わって出發するにさいして、遠征の準備のために利息つきの金を借りようとした。ところが、金貸したちは、諸侯の封地やその國々が函谷關以東にあること、その函谷關以東の形勢がどうなるかわからないと考えて、政府軍の諸侯に金を貸そうとはしなかった。ただ、無鹽氏だけは、千金を出資して、彼らに貸し付け、利益は貸付金の十倍をとることにした。三ヶ月たつて、吳楚は平定されたので、一年のうちに無鹽氏の利息は十倍となり、これによつて無鹽氏の富が關中全體の富に匹敵することになった。

もう一つ、秦の滅亡後の楚漢の戦いのさい、項羽・劉邦が滎陽で天下を賭けての攻防戦をくりひろげていたとき、その政治的局面を利用して、いつきに富豪となつた宣曲の任氏の場合は、こうである。

宣曲の任氏の先祖は、督道にある官吏倉庫の役人であつた。秦帝國が崩壊したとき、有力者たちはみな、われさきにと黄金や寶石をとつた。ところが、任氏だけは倉庫の穀物を窖にかくした。やがて項羽と劉邦の兩軍が滎陽で攻防戦をくりひろげると、民衆は農耕に従事することができなくなつたので、米の値段が一石が一萬錢にまで暴騰した。そして以前、有力者たちがとつた黄金・寶石はことごとく任氏のもとにころがりこんだ。任氏はこれを契機にして富をつ

くりあげたのである。それから他の富豪たちがぜいたくな生活をきそつていゝるあいだに、任氏は儉約につとめ、農耕・牧畜に力を入れた。農耕・牧畜に必要なものは、人々が安いものを争つて買うのに反して、任氏だけは、高くても良質のものを買い入れた。こうして數代のあいだ富みさかえたが、任氏の先代は、「わが家の耕作・牧畜からとれるもの以外は衣食にあてるな。仕事が終わらなければ、飲酒食肉はしてはならぬ」という家憲を嚴守した。この規則によつて、任氏はその村の指導者となり、そのために富みさかえて、陛下の尊敬を受けたのである。

この任氏の場合は、逼迫した政治的局面に乗じて、いつきに富を形勢した一例である。戦時には、黄金や寶石よりも、食糧だと、それを取つて窖に藏したところは、なかなか先見えがした商人だったが、その後の數代にわたつて、自分たちの生活はつましく儉約につとめ、客のために賣る品物だけは良質のものを仕入れるというやり方で、富の持續的保有をはかつたのは、誰にでもできることではなかつた。人の上にたつ指導者となり、天下に表彰されるような素封家になるためには、それだけの地道な努力と客を大事にする智恵の働が必要であつた。そこには抑制力のきいた富豪のモラルが生きていて、それが繁榮につながつてきたといえるであらう。

こうして、諸侯と同じように、年間に二十萬錢の利潤をあげることができた富豪たちは庶民階級とはいへ、諸侯に匹敵する存在であると、司馬遷はみていたのである。その認識があつて、それが彼に「貨殖列傳」を書かした理由であつた。

(四)

「貨殖列傳」で、司馬遷がとりあげた素封家のなかで、もつとも古い時代に屬する人物は、春秋末期に越王勾踐をささえた智謀の宰相、范蠡であつた。范蠡について、司馬遷は獨立した傳を立てていないが、「貨殖列傳」のほかに、「越世家」第十一のなかに、范蠡の生涯、とりわけ、越王勾踐のもとを離れて、遠く山東の地方で實業にたずさわり、素封家として成功した後半生を詳細に傳えている。

いちどは、吳王夫差によつて、故國の會稽山に追いつめられて降伏したのが、越王の勾踐。その勾踐をよく助けて艱難辛苦に耐えること二十餘年、ついに宿敵吳を滅して、會稽の恥をすぐところまで、もつてきたのが范蠡であつた。その後、勾踐は勢いに乗じて北進し、長江・淮河を越えて、華北の雄、齊・晉兩國を支配下に收めている。勾踐はさらに、周王室を補佐する覇者となり、天下に號令するにまでいたつた。范蠡はこのとき上將軍という最高の位に任ぜられていた。

日本でも、「ここに范蠡なきにしもあらず」という南朝の忠臣、兒島高德の歌で、よく知られている。隱岐の島に流された後醍醐天皇を慕つて、その後を追つたがかなわず、天皇一行をはげまそうとして歌つた。そこには「天子様には、越の范蠡のような忠臣がいはいとはかぎりません。わたしめもその一人でございます」という意味が、こめられていた。范蠡はそれほどすぐれた智謀の士であり、天下の大將軍であつた。そこが、はじめから富財を積むことを求めた「貨殖列傳」の他の富豪たちとは、違つていた。

それほどの人物がどうして野に下つて一介の商人となり、のちに富豪として「貨殖列傳」中に登場するようになったのか。

天下の覇者となり、越の國に歸還した越王勾踐はまさに得意の絶頂に

あつた。この勾踐の姿をみて、范蠡はこの主人とは艱難のときに苦勞とともに分かちあうことができても、平和な時とともに樂しみを分かち合うことができないと考へた。勾踐にたいして人間的に信じきれないにかがある、范蠡は見抜いていたのである。そこで、范蠡は勾踐に手紙を書いて、辭意を傳へた。「主君に惱みがあるときは、粉骨碎身し、主君が辱めを受けたときは、生命を投げ出す、これが臣下たる者の道であります。思へば、會稽で、王の恥辱を前にしながら生きながらえましたが、ひとえに吳に報復するためでありました。その目的をはたしましたいまこそ、その罪をつぐないたく存じます」と。文面はあくまで臣下の道をつらぬくため、生き恥をかうて生きた罪をつぐなうためとあつた。これを讀んで勾踐は怒つた。「なにをいうか。わしは、國を二分しても、二人でもつて國を治めたいと思つてゐるのだ。承知してくれないなら、そのときは、貴公を殺すだけだ」というのが、その返答であつた。

范蠡の決意は固かつた。ひそかに持ち運びのできる寶石の類いを船に積み込み、一族郎黨とともに海を渡り、ふたたび故國越に歸することはなかつた。越から海づたいに向かつたのは、北方の齊の國、今の山東省の一角であつた。名も鴟夷子皮とあらためた。

「貨殖列傳」によると、そのあたりの事情をしごくあつさり、つぎのように記している。

范蠡は會稽山での恥をすすいでもうと、ふうつとため息をついてこういつた。「計然けいねんがたてた七つの施策のうち、越の國はその五つを用いて本懐をとげた。もはやこれを國家にほどこしたからには、わたしとしてはこれを家に適用してみよう」。そこで小舟に乗つてひろびろとした揚子江一帯にこぎだし、姓名をかえて、齊の國に行つては鴟夷子皮と名のり、陶（山東省定陶縣）の地においては、朱公と名

のつた。

「越王世家」第十一では、前にのべたとおりで、こうあつさりした事情ではない。山東に無事、家族とともに亡命した范蠡はその地から、かつて自分と苦勞をわかちあつて勾踐をささえてきて、今も勾踐に仕えている家老職の種に手紙を送り、「蜚鳥盡きて、良弓は藏われ、狡兔死して、走狗は烹らる」の諺を引いて、種に越の勾踐のもとを一刻も早く離れるようにすすめている。それでも、種は主人のために越を去ろうとはしなかった。范蠡の予言は的中した。さんざん勾踐のために盡くした種は、空を飛ぶ鳥がいなくなると、用のなくなつた良弓が倉にしまわれてしまうように、野をすばしっこく走る兔が死んでしまうと、足の速い犬も役に立たないとばかりに煮殺されてしまうように、ついに勾踐の手で殺されてしまつた。

鴟夷子皮と改名した范蠡は、齊の國の海邊の土地で、息子とともに、汗水ながして耕作にはげんだ。そしてまたくまに數十萬の富をきづいた。齊の國では、彼の能力を見込んで、宰相に就任するように懇請したが、范蠡はふかいたため息をついて、「野にあつては、千金の財をきずき、仕えては宰相にのぼる。匹夫の身にとつて、これ以上の榮達はないが、榮譽がながくつづくのは、禍のもとだ」と語り、齊の國の招きを拒んだ。そして資産のことごとくを友人や村人に分けあたえ、特別高價な財産だけを懷にして、ひそかに村を離れ、陶の地に移住した。

陶は天下の中心地、物資流通の要路にあたつていた。經濟活動をするのに、これほど便利で有利な場所はない。范蠡はこう判斷したので。そこで、彼はふたたび陶朱公と名を改め、新たな生計の工夫をしてから、まず親子で農耕と牧畜にはげんだ。いっぽうで物價の變動をにらんで物資を動かし、手固く一割の利をかせいだ。かくして、ここでもまたたく

間に、巨萬の富をきずきあげた。素封家としての陶朱公の名は天下に鳴りひびいた。賢者にして、明哲の士である范蠡の出處進退は見事であつた。さて「貨殖列傳」は、范蠡の富豪ぶりを傳えて、こう結んでいる。

こうして十九年の間に、范蠡は三度も千金の富をえたが、貧しい友人や疎遠になつていた兄弟たちに二度も、これを分配してやつた。それこそ、「富をえると喜んでよいことをする」というものであろう。范蠡はのちに年老いてからだが衰えると、仕事を子や孫たちにまかせた。子や孫たちも、事業にはげんで、それをふやし、かくて億萬長者になつた。だから、富のことをいうものは、みな陶朱公を口にするのである。

范蠡のような生き方は、誰もまねのできることはない。先を見通しておいて、見通したことを實踐に移すことは、容易にできることではない。范蠡はそれができた。先見の明をもち、先見の明を生かす決斷力と實行力をそなえていた。身に危険が迫っていると察すれば、たとえ宰相の肩書きも、大將軍の地位でさえも、いさぎよくかなぐり捨てて亡命し、商賣に身をやつし、投機で財貨を手に入れることもいとわない。そこはそこで、家族と一緒に働き、繁榮につとめて、善を他人にほどこすことも忘れていない。司馬遷がいうように、陶朱公范蠡の身の處し方は、貴族たちの稱贊の的であつたにちがいない。

(五)

范蠡の生きた時代、春秋末期の富豪として、司馬遷が「貨殖列傳」でとりあげた人物の變わり種は、孔子の高弟で、儒教の學問にもはげんだ子

貢である。

子貢は曹と魯の地方で、物資の買占めと放出を適時におこなって、財産をふやし、孔子の弟子七十人のうちで、子貢がいちばん金持ちとなつた。同門の原憲は、米ぬかや酒かすさえ、ろくにありつけず、スラム街にひっそりと暮らしていたのに、子貢のほうは、四頭だての馬車に乗り、お供の騎馬を従えて、絹の束の贈り物を諸侯との交際におしみなく差し出した。彼が出かけてゆくところの國君は、みな庭におりたつて子貢と對等の禮をかわしたものだ。孔子の名聲を天下に宣揚したのは、このような子貢が孔子につき従っていたからである。これこそ「富者は勢力をえて、いよいよ有名になる」というものであろう。

子貢は衛の國に生まれ、孔子の弟子となり、孔子の天下周遊の旅では、最後の楚まで隨行した。孔子の死にあつては、他の弟子たちが三年の喪に服したのに、彼は更に三年、併せて六年の喪に服した。それだけ、子貢が孔子を敬慕することの深かつたことを示している。

孔子は言語において才ある者として、子貢をあげたのは、よく當つていた。十哲と稱せられる十人の弟子のすぐれた點をあげて、「德行では顔回、閔子騫、冉伯牛、仲弓、言語では宰我と子貢、政事では冉有と子路、文學では子遊、子夏」としたが、言語、つまり弁舌、言語の應接において、子貢が孔門第一の人物であると、孔子はみていたのである。『史記』に「仲尼弟子列傳」がある。仲尼、つまり孔子の弟子たちの傳記をまとめた一篇である。そのなかで司馬遷は、子貢についてこう語っている。

端木賜は衛の人で、字を子貢といい、孔子より三十一歳の年少であ

つた。子貢は弁舌がいともさわやかであつたが、孔子はいつもその弁舌を抑えた。孔子が子貢に、「お前と顔回とは、どちらがまさつていると思うかね」とたずねたとき、子貢は、「賜がどうして顔回とくらべものになりましょう。回は一を聞いて十を知りますが、わたしは一を聞いて二を知るにすぎません」。子貢がすでに孔子の教えを受けてからのことである。彼は孔子にたずねた。「わたしはどのような人間でございましょうか」。「お前は役に立つ器ものだよ」。「どのような器ものでございましょうか」。「瑚璉（宗廟の祭りに用うる上等の器）だよ」。

この資料は、子貢自身は德行においては顔回から劣ると自覺していたが、孔子はむしろ世の中に實質的に役立つ人間として、子貢の弁舌のさわやかさと見識の高さを高く評價していたことをしらせている。

孔子はよく子貢の人物を見抜いていた。瑚璉という器に喩えたが、宗廟で供物を盛る器で、玉で飾つて、器のなかにも最も貴重なものとしていた。瑚璉の器とは、宰相の器という意味にも解せられていた。一種の政治的、外交的手腕では、子貢の右に出ずる者はいなかつたにちがいない。事實、祖國魯が、隣國の齊に侵略されかねない危機的狀況におかれたとき、孔子が、他の諸國、晉や吳・越の諸國のもとに、使いとして派遣したのは、子貢であつた。子貢は諸國の利害を上手く説得し、魯は戦わずして、齊の脅威からのがれることができた。そのさい子貢の巧みな弁舌と鋭い洞察力について、司馬遷は「仲尼弟子列傳」で、實に詳細に語っている。その結果について、司馬遷はこう結んでいる。

子貢が一たび國を出て使いするや、魯を存し、齊を亂し、吳を滅し、晉を強くし、越を霸たらしめた。また子貢が一たび使いするや、諸

侯の勢力均衡を破らせ、十年のうちに、五國にそれぞれ變動をもたらしした。

子貢は買い占めが得意で、時機を見ては物資を回轉し利潤をあげた。また彼は好んで人の美點を稱揚したが、人の過失を匿すことはできなかった。かつて魯や衛の宰相をつとめたこともあり、家には千金の富を積んだが、最後は齊で生涯を終えた。

「貨殖列傳」に登場する富豪のなかに、孔子の門弟である子貢がいたことを知って人は驚くにちがいない。司馬遷は、米ぬかや酒かすでさえ、ろくにありつけないまま貧民窟で暮らしている同門の原憲を引き合いに出しながら、子貢の經濟的手腕をたたえている。しかも、師の孔子の名聲を天下に宣揚したのは、諸侯國の君主と對等に禮を交わすことができた子貢が孔子につき従っていたからであると言いきっている。

事實、子貢は孔子の人物について、「私は生涯、上に天を仰いできたが、その高さを知らない。私は生涯、地を踏んで生きてきたが、地の深さを知らない。私が孔子に仕えたのは、渴した者が水瓶を持って川にゆき、そして渴をいやしながら、その川の深さをしらないようなものである」と語っていた。孔子の臨終を看取ることができたのは、子貢獨りであった。よほど、えにしの深い師弟であつたとみえる。

孔子はその子貢について、「賜（子貢のこと）は、私の教えに従わずに、貨殖に従事したが、その判斷はしばしば道理に的中した」と評している。いかにも德行を第一にした孔子らしい評價である。ついでながらいえば、貨殖という言葉が初めて出てくるのは、この『論語』のなかにおいてである。さて、司馬遷ならば、この孔子の子貢評價をひきとって、きつとこういうであろう。貨殖の道で成功し素封家となつた子貢が、師の孔子を日月のごとく敬慕していたからこそ、いちどは喪家の犬とまでみなさ

れた孔子は、聖人として天下にその存在を知られるようになったと。事實、そうであつた。

子貢のあとに、「貨殖列傳」に登場する主要な素封家は白圭である。白圭は周の人であるところがあるが、出身地が洛陽にちかい周の地方の出身という意味である。時代は、魏の文侯（前四二四〜三八七）のときで、土地の生産力を最高度に利用することにつとめた李悝と並んで、白圭をとりあげ、彼は當時の時期的な價格變動を觀察するのを得手としていたと、司馬遷は記している。

白圭の口ぐせは、相場師らしく、「人が捨てるときには、わしが取る。人が取るとき、わしがくれてやる」というものだつた。要するに、世の中の人が、賣り急ぐときは、買いにまわり、人が買ひあさるときは、賣りに出すのである。これは、相場の變動をみて、富を紡ぐ相場師の道理である。だから、白圭は、豐作には穀物を安く買ひ取り、絹糸や漆を賣り出し、繭が出まわる時期には、絹や絹わたを安く仕入れ、不足している穀物を高く賣り出した。こうして白圭の蓄積はだいたい年ごとに倍増していった。彼は貨幣所得をふやそうとするときには、値の安い穀物を買ひとり、穀物の收穫をふやそうとするときには、上等の種もみを買ひ取り、上質の穀物の收穫を待つて、高く賣り出した。

白圭は儉約家で、欲望をおさえて、飲食を質素にし、衣服を節約して、仕事をしてくれる召使いと苦樂をともにした。こうして奴僕とともに汗水たらして仕事にはげむいっぽうでは、機をつかんで利を追求するすばしこさは、猛獸、猛禽の類が獲物を間髪入れずに襲うようであつた。だから白圭はこういつていた。「わたしは事業を営むのは、あたかも名宰相の伊尹や呂尚が策謀をめぐらし、兵法の達人孫子や吳起が兵を動かし、商鞅が法術を執行したのと同じである。したがって臨機應變に對處する

智慧がなく、決断をくだす勇氣がなく、ギブ・アンド・テイクを解するおおらかさがなく、苦境をたえぬくしぶとさが無いものには、わたしの方法を學ぼうとしたって、わたしはけつして教えないのだ」と。

例えば、苗代なえしろに使う種たねもみには上質の物を使ったり、衣食を儉約して欲望をおさえ、奴僕といっしょに汗をながしている白圭の生き方には、あきらかにただひたすら利殖のために投機に入る人々とは違って、どこか眞摯しんしな篤實さともいえる人生の心映えがあった。そこには、富を手にするために、當然味わねばならぬ苦勞、富を産みだすために必要な節度といえるものがあつた。

だからこそ、白圭は、みずからの經濟行為を、伊尹、呂尚の策謀に、孫子、呉起の用兵術に、そして商鞅の法術にたとえることのできる誇りを持つていたのである。

白圭のつぎにとりあげてみたいのが、齊の富豪、刁間ちようかんである。奴僕とともに汗をながして働き、苦樂をもにした白圭の美德とは、少しは違うが、奴僕をいやしめず、彼らのなかにある商才をみつけると、それを積極的に活用したのが、刁間である。悪知恵のはたらく奴僕は、どこでも嫌われ者だが、刁間はその悪知恵に目をつけ、交易商賣の場に、彼らが活躍できるようにした。こうして奴僕の働きが功を奏するようになる、それにとりあつて、刁間も財をなしていったのだから、これも美德の商法といえるであろう。

司馬遷は、この刁間を「貨殖列傳」でとりあげ、こう語っている。

齊の地方では、奴僕を輕蔑する氣風があつたが、刁間だけは、彼らを尊重した。悪賢い奴僕は人にいやがられるものだが、刁間だけはこれをひきとつて使い、魚や鹽などの商品を動かして利益を追求さ

せた。彼は車馬をつらねて、地方長官の太守や諸侯の家老と交際する身分であつたが、奴僕たちを信任することはいよいよ厚く、ついに彼らに腕をふるわせて、數千萬の富を築いた。だから、「爵位を得るより、刁奴ちようどになるか」と歌われたものだが、それは刁間が有能な奴僕自身にも豊かな生活をさせながら、彼らの力をじゅうぶんに發揮させたことをよく示している。

漢王朝が成立する以前に、素封家となつた人々について、范蠡、子貢、白圭、刁間の四人のほかは、しごく簡略に、鹽池の猗頓いどん、烏氏の倮ろ、巴の婦人である清、そして邯鄲かんたんの郭縱かくしゆうをとりあげて、こう記述している。

猗頓いどんは鹽池えんち、現在の山西省運城縣あたりの鹽によつて富豪となつた。邯鄲かんたんの郭縱かくしゆうは製鐵業によつて、王者と同等の富を形成した。烏氏うし、今の甘肅省涇川縣の倮ろという人物はもと牧畜業を営んでいたが、家畜がふえると、それをすつかり賣りはらい、それを元手にみごとな絹織物を買つて、北方の異民族の戎じゆうの王さまにひそかに献上した。戎の王さまは、その代價の十倍にあたる家畜を彼に返しあたえた。かくして家畜の數は谷いっぱいを單位として、馬牛は幾谷という數えかたをするほどにふえた。秦の始皇帝は、倮を諸侯と同じように待遇し、時節ごとの拜賀の式典には大臣たちとともに謁見をたまわつた。また巴、現在の四川省重慶あたりの後家さんで、清という名の婦人は、その先祖が丹沙たんさの坑こうをみつから、數代にわたつてその利益を獨占し、この一家もはかりきれないほどの財産をもつていた。清は後家でありながら、よく家業を守り、財力で自營手段をはかつたので、侵害されることはなかつた。秦の始皇帝は清を貞婦となし、客分として待遇して、彼女のために「女懷清臺じょかいせいだい」という高殿

を築いた。

さて俤は身分いやしい牧場主であり、清は片田舎の後家であったのに、大國の諸侯と對等の禮遇をうけ、その名は天下にとどろいたのは、ひとえに富のせいではなくてなんであろうか。

繰り返しいえば、秦が滅び、漢王朝が出現して、天下が統一されると、法律によるしめつけがゆるやかになり、關所や渡し場の制限を解き、山林の伐採、沼澤の漁獲にたいする禁制をゆるめた。そこで、商人は自由に天下を往來して、いたるところで商品の交易をおこない、欲しい品物を手に入れることができるようになった。國の規制がしだいにゆるやかな方向に流れるようになると、自然そのなかから新たな富豪や大商人が生まれてきた。そのなかで、「貨殖列傳」に名をつらねた一人が、蜀の卓氏である。

もともと蜀の卓氏は、祖先が趙の出身であつて、製鐵業に従事して富裕となつた。秦が趙を滅ぼして併合すると、住民の一部を邊地に強制移住させた。卓氏も使用人から家財まですっかり秦に沒收され、夫婦で牛車を押して移住者の群に身を投じていた。移住者のうち多少なりとも余裕のある者は、争つて役人に賄賂をおくり、近い土地の葭萌^{かぼう}に住みつたが、卓氏だけは、目のつけどころが違つていた。葭萌は土地が狭いうえに、地味がよくないとみていたので、進んで遠方へ移住したいと希望した。その結果、卓氏夫婦が送られたのが、奥地の蜀の臨邛^{りんきやう}であつた。

臨邛に入ると、蜀氏は意氣込みもあらたに鐵山に入り、鐵器の鑄造にはげんだ。製鐵業で成功すると、知恵をしぼつて、その金を交易にまわして、また財をなし、ついにその富は蜀や南の滇^{てん}の地方に住む人々を壓倒するにいたつた。奴婢の數も千人に及び、その豪華な生活よりは、さながら王者を思わせるほどであつた。

『史記』の「司馬相如傳」に、「臨邛の中、富人多し。而して卓王孫は家僮八百人あり」という記事がのこつてゐる。司馬相如は、武帝の時代、「上林の賦」「大人の賦」を著して、武帝の寵愛をえた文學者であつた。その司馬相如が若い時分に戀仲となり、成都に驅け落ちた女性に、卓文君^{たくぶん}がいる。卓文君こそ、「貨殖列傳」に出てくる臨邛の富豪・卓氏の當主卓王孫の娘であつた。

驅け落ちした先の成都の家は、壁よりほかにない。司馬遷の表現をかりれば、「家屋は徒だ四壁立つのみ」であつた。好きで一緒になつたものの、金持ちの娘は、司馬相如の貧乏暮らしに耐えきれず、ふたたびつれだつて臨邛に舞い戻つた。二人は持ち物のすべてを賣り拂い、その金で居酒屋を一軒買つて水商賣をはじめた。司馬相如は妻の卓文君に客の相手をさせ、自分はふんどし一枚になつて働いた。それが人目をひき、その噂が、卓王孫の耳に入つた。卓王孫は身のちぢむ思いにかられ、仕方なく奴隸百人、錢百萬を卓文君に持たせてやつた。それで司馬相如は卓文君と故郷の成都に歸り、土地屋敷を買つて、金持ちとなつた。司馬相如が武帝に仕えて、漢代隨一の詩賦文學の大家となつて有名を馳せるのは、この後のことである。

漢代に富財をなした素封家にふれたあと、司馬遷はこういつて結んでいる。

彼らはみな爵位に應じた封邑^{ほうい}も、おかみからもらう俸祿もなく、法律を惡用し、罪を犯して富をつくつたわけでもない。物の道理をおしはかつて行動し、時の動きに應じて姿勢をかえ、そこから生まれた大きな利潤をわがものとしたのである。商取引によつて財産を作り、農業に資本を投下して財を守つたのである。激動する時期に乘

じていつきよに勝負し、おだやかな英知によつて、えたものを維持したのである。彼らの態度變化は節度を守るところがある。だから記述する價值があつたのである。

『史記』に「貨殖列傳」を構想し、記録した司馬遷の意圖は、すべてここに集約されていた。

『史記』の「貨殖列傳」は、司馬遷の經濟思想を知るために重要である。彼の經濟思想は、上からの統制をきらい、自由な發想で、利を求めることに敏感であつた素封家たちの生き方に象徴的にあらわれている。これは、漢の武帝の前半期、いまだ國家統制がゆるやかであつた時代までの經濟の姿であつた。

ところが、匈奴政策をはじめとして版圖擴大に積極的にのりだした武帝統治の後半期の經濟狀態は惡化の一路をたどつた。

そのため法の網の目をこまかくして民衆に重税を課し、抑商政策を打ち出し、時代は暗轉する。それをきびしく批判したのが、『史記』の「平準書」である。

つまり、「貨殖列傳」と「平準書」は、司馬遷の經濟思想をみる上で、

銅貨の表と裏の關係にあつた。本稿はその表の部分を讀み解くことに終始したものである。

注

① 『老子』下篇第八十章に「小國寡民、有使什佰之器而不用。使民垂死而不遠徙。雖有舟輿、無處乘之。雖有甲兵、無處陳之。使人復結繩而用之。良其食、美其服、安其居、樂其俗。隣國相望、雞犬聲相聞、民至老死、不相往來。」とある。

② 『漢書』卷六十二司馬遷傳贊に「其（史記）頗繆聖人。論大道則先黃老、而後六經。序遊俠則退處士、而進姦雄。述貨殖則崇執利、而羞賤貧。此其所蔽也。」とある。

③ 『管子』卷一權修第三に「一年之計、莫如樹穀、十年之計莫如樹木。終身之計莫如樹人。一樹十穫者木也。一樹百穫者人也。」

④ 『論語』先進第十一に「德行顏回、閔子騫、冉伯牛、仲弓。言語宰我、子貢。政事冉有、子路。文學子游、子夏。」

⑤ 『論語』先進第十一に「回（顏回）也其庶乎。屢端本賜（子貢）不受命而貨殖焉。憶則屢中。」

⑥ 『漢書』卷六十七上 司馬相如傳を參照。

（神戸女子大學名譽教授）